

# なりたの昔話

第15回

このコーナーでは、昔から語り伝えられてきた成田の昔話や伝説などを掲載しています。

【参考文献】コミュニティ成田No.25（1988年10月発行）

## 木内惣五郎

江戸時代のことです。

公津村の名主で木内惣五郎という人がいました。そのころは公津村も含めた印旛郡一帯が、佐倉の堀田様の領地でした。

殿さまをはじめとする武士たちは、村々から取り立てた年貢米で生活をしていましたが、とくに印旛沼一帯の取り立ては厳しく、年貢米を納めると食べ物に不自由する人がたくさん出ました。

ある年の秋に、今までにない大きな台風が来ました。田畑の作物は、ほとんどだめになり、年貢米を納めるどころではありません。けれども、お城からはいつものように取り立てる、と言ってきました。

「これはひどい仕打ちだ」「おれたちが死んでもかまわないと思っているんだ」「みんな、心を一つにして、立ち上がろう」

とうとう389カ村の人々は、がまんができなくなり、手近な嫌などを持って、騒ぎを起こそうとしました。

そのとき、惣五郎は、「武士と戦ってもたくさん死人を出すだけで、なんの解決にもならないぞ。どうかここは私ら名主に任せてくれ」

と、説得し騒ぎを収めました。

名主らはさっそく、江戸まで出掛けて堀田の殿さまに、年貢米を減らしてくれるようお願いしましたが、聞き届けてもらえませんでした。そこで、相談の結果、惣五郎の意見を取り入れ、今度は、將軍の近くにいる、久世大和守に訴えました。訴えが受け取ら

れたので、惣五郎をはじめとする6人が代表として宿に残って返事を待つことにしました。

しかし、またもだめでした。こうなれば將軍に直接訴える方法がありません。でもこの方法を取れば、訴えた者は死刑になります。その役目を引き受けた惣五郎は、家族に別れを告げるために公津村にひそかに戻る決心をしました。

この時すでに、惣五郎はおたずね者になっていたのです、役人に見つかるが大変です。色々と苦勞し、人の助けもあってやっと家に帰ることができました。

家族と別れの水杯をくみかわした惣五郎は、その夜のうちに江戸に引き返しました。そして、上野東叡山へお参りに来た將軍へ、ついに直接訴えることに成功したのです。

惣五郎は、たちまちその場で捕えられました。佐倉に連れ戻された後に、公津ヶ原の刑場ではりつけの刑となり、4人いた子ども全員も、打ち首にされてしまいました。

惣五郎たちの願いは、その後、江戸から注意もあつたかなえられ、村人たちも明るさを取り戻しました。

それというの、惣五郎の命に代えた働きのおかげだと、村人たちはお堂を建てて供養し、惣五郎に佐倉宗吾という名を贈って、今に語り継いでいます。



現在の宗吾霊堂

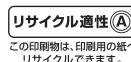
## 編集後記

成田ニュータウンの夏の風物詩として親しまれている「成田ふるさとまつり」。広報なりたでも毎回取材に訪れますが、近年は日中の厳しい残暑を避けてか、夕暮れの迫る頃合いになると来場者の数が急激に膨れ上がり、会場は人々の熱気に包まれます。その起源は昭和55(1980)年にさかのぼり、9月に初めて行われた「成田ニュータウン秋祭り」が始まり。平成4(1992)年に現在の名称に変更されて今に続いています。

平成25年8月15日号 No.1249

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。